

# 猿小僧

夢野久作

青空文庫



一人の乞食の小僧が山の奥深く迷い入って、今まで人間の行った事のない処まで行くと、そこに猿の都というものがあつた。

猿の都は広い野原と深い森に囲まれた岩の山で、その岩には沢山の洞ほらあな穴が出来ていて、まるで大きなお城のようになって、その中に沢山の猿が住まってキャツキャと騒ぎまわつて日を送っているのであつた。乞食小僧がそこへ来ると、猿共は人間を珍らしがって大勢まわりに集まつて来たが、何と思つたか、皆で小僧を担かぎ上げて、お城の奥深く住んでいる猿の王様の処へ連れて行つた。王様は大きな猿で、石の椅子の上に枯れ草を敷いて坐つていたが、乞食小僧を見ると驚いて岩の天井に駈かけ上つた。けれども小僧は落ち付いて、街で貰つた煎餅せんべいを一枚懐ふところから出して王様に遣ると、王様は大層嬉しかつたらしく、家来の猿共に云い付けて果物を沢山持つて来こらして小僧に遣つた。小僧は果物が大好きであつた。そして、こんな沢山喰べ物があるならば、街で乞食をしているよりもここに居る方がずつといいと思つた。

翌<sup>あく</sup>る日から乞食小僧は猿共と一所になつて遊んだ。そして先<sup>ま</sup>ず白い木の皮で冠<sup>かんむり</sup>を造つて、赤い木の実で染めて、王様に冠せてやった。王様は喜んで、又沢山果物を呉れた。それから小僧は木の枝を集めて自分の家を造つた。そして、感心して見ている猿共にも造つてやった。その他、小僧はいろいろな良い事を猿共に教えてやった。谷川に橋を掛ける事。怪我をした時に赤土を押し当てて血を止める事。渋柿を吊して露<sup>ほしがき</sup>柿を造る事。胡桃<sup>くるみ</sup>を石で割つて喰べる事。種<sup>たね</sup>子を蒔<sup>ま</sup>いて真<sup>ま</sup>瓜<sup>うり</sup>を造る事。

その代り少年は、猿からもいろいろな軽業を習つた。木登り方は先生の猿よりも上手になつた。綱渡りも名人になつた。枝から枝へ飛び渡つたり、足を引っかけたてブラ下つたり、身の軽い事鳥のようで、地面の上を歩くよりも木の上を駆けまわる方がずっと早い位になつた。その中<sup>うち</sup>に猿の言葉はいうに及ばず、いろいろな獣<sup>けもの</sup>や鳥や虫の言葉まですっかり記憶<sup>おぼ</sup>えてしまったので、今は遊び友達が大変に殖えて、いよいよここが面白くて面白くて堪らないようになつた。

すると或る日の事、猿の王様の処で大変な評議が始まった。それは一匹のカナリヤが知らせに来たので、何でも山一つ向うに狼の強盗が沢山集まっています、「猿の癖くせにお城に居るなんて生意気だ。これから攻め寄せてお城を取って、手向いをする奴は片つ端から喰つてしまおうではないか」と評議していると云うのであった。

これを聞くと猿共は、赤い顔が青くなる程驚いていろいろ相談をしたが、何しろ喧嘩けんかすくでは狼に敵かなわないから一層いっそうの事、狼に喰い殺されないうちにここを逃げ出して、他の所すまいにいい住居を探そうという事に決めた。けれども小僧はこれを押し止めて、猿共を皆洞ほらあ穴なの中に隠して入り口を塞ふさいで、自分一人森の外に出て狼の来るのを待っていた。

狼はどうとう或る夜やつて来た。その数は何千か何万かわからぬ程ヒシヒシと猿の都を取り巻いて、先ず一時に鬨とぎの声を挙げて大波の打つように攻め寄せて来た。けれども小僧は驚かなかつた。狼が近寄ると、小僧は懐ふとこから燧ひうち石いしを出して森の外のちの枯れ草に火を放つけた。すると折りから吹いて来た烈しい夜風に誘われて、見るうちに焼け広がって轟々ごうごうと音を立てながら狼の方に吹きかかつて行つた。そのために深い草の中に居た狼共は皆焼のちけ死んだ。死なないものも火の勢いに恐れてチリチリバラバラに逃げ失せた。その後狼共は又と再びこの猿の都に攻め寄せて来なかつた。それから猿共は王様を始め皆、小僧を神

様のように恐れ敬つて、毎日いろいろな美味い果物を捧げて、何でも云う事を聞くようになった。小僧は益得意になつて大威張りで遊びまわつた。

## 三

或る日の事、小僧は只一人で山の中を遊びまわつていると、思わず遠方まで来て一つの湖の傍へ来た。その湖は大変景色がよかつたので、小僧はぼんやりと見とれていると、やがて沖の方から一艘の帆掛船が来るのが見えた。小僧は久し振りにこんなものを見たので、何だか懐かしいような気がしてなおも一心に見ていると、その船はだんだん近寄つて、小僧の眼の前の砂原に着いて帆を卸した。そしてその中から、三人の荒くれ男が七八ツ位から十二三位の美しい子供を都合十三人、猿轡を嚙まして後手に縛つたまま引きずり出して、砂原の上に坐らせた。そしてその前に一つ宛青い壺を据えて、その横で三人共庖丁を磨ぎはじめた。

「これは生き肝取りに違いない。助けてやろう」

と小僧は思った。そうしてつかつかと傍に近寄つて、一人の男に向かつて、

「もしもし。私の生き肝を序ついでに一つ取って下さい」

と頼んだ。荒くれ男は三人共、不意に奇妙な子供が出て来た上に、こんな大胆な事を云ったので、驚いて顔を見合わせた。けれどもやがてその中の親うち分らしい一人は眼をギョロリと光らして、気味悪く笑いながら、

「ウン。取られたければ取ってやらん事もないが、一体何だつてそんなに肝が要らなくなつたんだ」

「私は今までこの山奥の猿の都に居たんです。そして猿共と一所に木登りをするけれども、木から木へ飛び移つたり綱渡りをするのが恐ろしくて恐ろしくて、どうしても猿共かなに敵わないんです。ですから猿の王様にそのわけを聞くと、王様が云うには、人間の肝は猿の肝より小さいからそんなにビクビクするのだ。俺は今七八ツ程肝を仕舞つて、時々出して洗濯しているが、欲しければ新しいのを一つ遣ろう。その代り今持っているのを棄ててしまえというのです。けれども私はどうしたら肝を出していいか分らないから、誰か肝を取る事の上手な人に頼もうと思つてここまで来たところですよ。丁度いいから取って下さい」

「ハハハハ。貴様は馬鹿だな」

「馬鹿じゃありません。本当に頼むんです」

「ウン、そんなら取つてやろう。その代り少し痛いからじつとしていなくちや駄目だぞ」  
「痛い位驚きません」

「よし。こちらへ来い」

と云つて、親分は一本の大きな樹の下に連れて行つた。小僧はその幹によりかかつて、胸を開いて、

「さあ取つて下さい」

と云いながら突き出した。あとからついて来た二人の男は驚いて、

「馬鹿な小僧だなあ」

と云つた。

けれども親分らしい男は黙つて、今磨いだけばかりの庖丁を小僧の眼の前に突きつけて、睨み付けて云つた。

「さあいいか」

これを見ると、小僧は急に高らかに笑い出した。

「アハハハ。お前達に肝を取られるような間拔じゃない。今のは鳥渡嘘を吐いて嘲弄つたのさ。態さまを見ろヤイ」



と云いながら、親分の顔にプツと唾つばを吐きかけた。親分は「奴おのれ」と云い様さま、小僧の胸を目がけて庖丁をグサと突き立てた。けれどもその胸は板のように固かった。ハツと驚いてよく見ると、庖丁は木の幹に突つ立つていて、小僧の姿はどこへ行つたかわからなかつた。

「ヤーイ。馬鹿野郎。間抜け野郎。ここまでお出いで。甘酒進上」

と云う声が木の上からきこえて来た。それと一所に水がバラバラと降つて来た。見ると小僧はいつの間にか木の上に駈け上つて、三人に小便をしかけていた。三人は怒るまい事か、庖丁を口に啣くわえ、手て手に木に登り初めたが、三人が小僧の傍まで来ると、小僧は又一段高い処に登つて散々に悪態を吐ついた。三人は益ます益ます憤あやつて、どこまでも追いつめた。そしてとうとう一番天てん辺へんまで来ると、小僧は鳥のように隣りの木の枝へ飛び移つて、スルスルと地面へすべり降りて砂原へ来て、十三人の子供を船に乘せて帆を揚げた。三人の悪者が木から降りた時は、船はもう沖の方へ出ていて、只ただ小僧の声ばかりが岸まで聞こえていた。

「馬鹿ヤーイ。態さまを見ろヤーイ。小便引つかけられやがったヤーイ」

## 四

船が向う岸に着くと、小僧は十三人を船から卸おろして、家はどこだと聞いて見ると、皆この国の都たつとの貴い人々の子供ばかりで、中にも一番小さい七つになる児こは天子様のお世継ぎの太子様であった。或る日、十三人は揃って川遊びに行った途中、お伴の者の船にはぐれて悪者共に捕えられたのであった。小僧はそれでは都まで送ってやろうと約束すると、皆泣いて喜んだ。それから小僧は十三人を、一番小さい太子様から順々に一列に並べて、青い壺を胸の処に掛けさせて都の方へ出発した。そして口々に次のような歌を唄わせた。

私達は都の子供

都合合せて十三人

生き肝取りにかどわかされて

手をば縛られ口ふさがれて

青い壺をば背に負わされて

歩け歩けと打ちたたかれて

野越え山越え悲しい旅路  
泣いても泣いても声は出ぬ

船は帆揚げて潮越えて  
砂の浜辺に座らせられて  
胸を割かれてしまったならば  
あとに残るは只生き肝と  
肝を封じた青い壺

不思議の生命を助かつて  
都へ帰る十三人  
生命の代りに首からかけた  
壺は青壺瀬戸物壺よ  
中に溜るは助かる生命  
うれしうれしの喜び涙

又は父とと様母はは様恋し

兄あに様姉いもうと様妹もうと弟

恋し恋しのなげきの涙

又はこの歌きく人々の

清い尊い情の涙

たまりたまつた行く末は

遠く遠くの都まで

やがて帰つたその時に

土産にするもの一つ

汲んで尽きせぬ人間の

涙を湛えた青い壺

ほんに私の生命いのちの壺よ

大切だいじな大切な青い壺

空を行く日よ野を吹く風よ

心して照れ心して吹け

壺に溜った生命いのちの泉

清い涙を乾かすな

これを聞いた人々は皆、涙を流して気の毒がって、子供達の胸にかけた壺の中に喰べ物やお金を入れてくれた。小僧は見えかくれにそのあとに従いて行って、自分は木の実を千切ったり、掃はき溜だめを漁ったりして喰べて行った。

## 五

都へ帰る途中に大きな森があつた。そこへ来ると一匹の鳶とびが来て、小僧に大変な事を知らせた。

「早くどこかへ隠れなければ危ないよ。三人の悪者が弓と矢を持って、お前達を追っかけて来るよ」

小僧はこれを聞くと、その三人の悪者はこの間の生き肝取りに違いないと思つた。そし

て、「最早<sup>もはや</sup>今度は勘弁しないぞ」と思いながら、子供達を皆木の上に隠して、自分は直ぐに近所の村に行つて何か探しまわつた。見ると只<sup>と</sup>ある小径を横切つて沢山の蟻が行列を立てて行くから、

「どこに行くのか」

と聞くと、一匹の大きな蟻が頭を上げて、

「砂糖を取りに行くのです」

と答えた。

「俺も砂糖を探しているのだ。何なら仕事を手伝つてやろう。その代り山分けにしてくれなければ嫌だ」

「どうぞ手伝つて下さい。あまり沢山あつて運び切れないので困つて居るのです。砂糖は向うの広場に落ちております。大方<sup>おおかた</sup>砂糖車から零<sup>こぼ</sup>れたのでしよう」

小僧はそこへ行つて見ると、成る程沢山の砂糖が散らばつて落ちていた。それを掃き集めてその半分を蟻の穴の傍へ持つて行つてやると、蟻共はもうこれだけで穴に這入り切らないと云つて喜んだ。小僧はあとの半分を持つて引返して、森の奥深く這入つて行つた。やがて生き肝取りの悪者三人がやつて来ると、小僧は往来の真中へ飛出して大きな声で

笑った。

「ヤーイ。又来やがったな。馬鹿野郎共。今度はあべこべに生命いのちを取ってやるぞ。その前にこれでも喰らえ」

と云いながら、お尻を出してたたいて見せた。

「それ」

と云つて三人が弓に矢を番つがえると、小僧は早くも身をかわして、子供達こどもたちが隠れているのと反対の森に駈け込んで、木の頂上に逆立さかだちをしたり、逆様さかさまにブラ下つたりして見せた。そしてだんだん三人を森の奥深く誘い込んで行つた。三人の悪者はドンドン追っかけて行つたが、その中の一人はあまり上ばかり見ていたので、うっかりして熊くま蜂まんばちの巢どつに足を踏み込んだ。驚いて飛び退くと、そのあとから何千何万とも知れぬ熊蜂が一度に鬨どつと飛び出して、三人の悪者に飛びかかつて、滅茶滅茶に刺して刺して刺し殺してしまつた。悪者共が死んでしまうと、小僧は悠々と樹の上から降りて来て、

「ヤア、熊蜂共。御苦勞御苦勞。さあ、約束の通り御褒美を遣るぞ」

と云つて、砂糖つつまの包を投げてやつた。熊蜂共はブンブンと喜んで、

「これさえ下されば、私共は生命いのちも何も要りません」

と土に這い付いてお礼を云った。

## 六

こうして猿小僧の御蔭で十三人の子供は皆無事で都に着いて、両親や兄弟に会う事が出来たが、皆の者の喜びは譬えたとようもなかった。中にも王様は小僧を御殿のお庭に呼び寄せ、太子を助けてくれた御褒美にと云つて、いろいろのものを賜わつたが、小僧はお金や着物などはちつとも欲しがらずに、只喰べ物ばかりを欲張つた。そして、あまり嬉しかつたので、逆立ちをしたり筋斗とんぼ返りをしてお眼にかけた。王様も大層お喜びで、今日からこの小僧に乞食をやめさせて、御殿の中うちに抱えてやれとお言葉があつた。

それから小僧は御殿の中うちでお湯に入れられて、美しい着物を着せられて、いろいろな礼儀や学問を教えられたが、小僧はそんな事は嫌いであつた。その中うちでも、広い長い重たい着物を着せられるのが一番厭いやで、うっかりするとお付の者の眼を盗んで直すぐに下着一枚になつて、御殿の屋根の上を駈けまわつた。それから夜はどうしても寢床の中に寢ないで、王様の馬小屋の藁の中に寢た。その馬は王様を載せるのが自慢で、「自分が通ると、人間



が皆頭を下る」と小僧に話して聞かせた。

「それだからお前は馬鹿なんだ。それはお前に頭を下げるのじやない、王様に下るのだ。そんな事を喜んでいるより、俺と一所に来て野原で遊んで見る。日は照るし、風は吹くし、川は流れているし、美味い草はいくらでもあるし、こんな面白い気持ちのいい事はないぜ」

と話して聞かせた。

「そんなら連れて行って下さい」

「うん、連れて行ってやろう」

と約束したが、やがて夜が明けると直ぐに門を外して、馬を出して、その背中に飛び乗って王宮の御門の処へ来た。門番は驚いて、

「どこへ行く」

と尋ねた。

「王様の馬と一所に野原に遊びに行くのだ」

「この馬泥棒」

と云う中に門番は馬を押えた。猿小僧は直ぐに馬の背から御門の屋根へ飛び上って、外

へ出てしまった。

## 七

小僧が久し振りに山奥の猿の都へ帰って来ると、猿共は泣いて喜んだ。小僧も生れて始めて嬉し泣きに泣いた。そして云った。

「人間の都より猿の都の方が余つ程いい。もう決してここを出て行かないから安心しておくれ」

## 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年5月22日第1刷発行

初出：「九州日報」

1920（大正9）年1月

※底本の解題によれば、初出時の署名は「萌圓山人《ほうえんさんじん》」です。

入力：柴田卓治

校正：もりみつじゅんじ

2000年1月17日公開

2012年5月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 猿小僧

夢野久作

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>